昔の備忘録（メモ帳）より

JA1VWB　木村　一乗

先日　久しぶりに書棚を整理して見ました、古ぼけた本、ノートなど整理が出来ました。
そんな中思いがけず四十年位前の備忘録（メモ帳）が出てきました。
思わず手を止めて懐かしく読み面白い内容が書いてありました。
「ユダヤジョークは世界に冠たる傑作である」とよく言われる、疲れた時にはいかがですか。

ユダヤジョーク　「ジャック・ハルペン　笑いの傑作選より」 と書きとめてありました。

＜結婚は足かせ、女は死神の召し使いである＞
・・・・・某女流政治家なら言わない事・・・・・

恋人同士の会話

若い男と女が、汽車に乗って旅をしていた。 二人は、いかにも楽しそうに
おしゃべりをしていましたが、やがて話にもタネが尽きると、
しばらく黙りこくってしまいました。
しばらくすると、女の方が小声で話を切り出した。
「ねえ、今なにを考えているの？」
男は彼女の気を引く言葉を捜した。
「ねえ、今なにを考えているの？
「ああ、君と同じ事を考えているのさ」
「あら！あらいやーだ。あたしと同じこと考えていたの？エッチだわあ。好きね全く。
このドスケベ！
〈あんたも　すきねー・・・・・コメデイアン・・・茶さんを思い出し！！＞

ブスでけっこう

結婚相談屋のヨデ翁はよく言ったものである。
「近頃の若い連中ときたら、なんでああもきれいな女ばかり嫁にしたがるんだ。
へん！オレにゃさっぱりわからんね。 きれいだろうが、きたなかろうが、
たいした違いはなかろうに。
寝てる時女房の顔が見えたらてーしたもんだ。メシ食ってる時は皿を見てるんだろ。
シナゴーグでお祈りしてる時にゃ、神様で頭がいっぱいだろうよ。
店屋に入りゃ買い物か仕事以外何を考えるんだ。 寝る時でも食べる時でもシナゴーグ
の中でも店の中でもなけりゃ、外に何があるんだ。
公園の散歩！　女房がブスなら公園の散歩ができないってこたあないだろう！

＜シナゴーグ：ユダヤ教会堂−礼拝祈祷など、宗教上の集会をする場所。＞

〈我が家の偉い人のことかいなー＞

ユダヤ笑法でユダヤ商法を

＜守銭奴は、人に何かをして貰う時、一回お金を払うより千回ペコペコ頭を下げる＞
・・・・・・・・・・ユダヤ商人の知恵・・・・・・・

これぞユダヤ商法

ここはドイツ、ヒトラーがユダヤ商法をさんざんにこきおろしている。
「フン、ユダヤ商法なんて評判倒れに違いないわい。ユダ公の商売なぞヘマばかりで
最低に決まっとる」
側近がそばで聞いていて、ヒトラーのご機嫌をとろうとした。
「では総統、優秀なナチ親衛隊員と比べてはいかがです。ベルリンじゅうの煙を貸して、それで商売をさせてみるんです。これでナチ隊員の優秀さを見せてやるんですよ」
ヒトラーは大喜び、ナチ隊員とユダヤ商人が呼び出された。
まずナチ隊員。
「なんですって。ベルリンじゅうの煙？私は気違いではありません、いくら総統のおっしゃることでもそんなのごめんこうむります」
次に、ユダヤ商人。
「ええ、よござんす。一年間ですね」
「ああ、五万マルクでな」
「フム、普通なら二万マルクにネギるところですが、ほかならぬ総統のおっしゃることですから三万マルクでおマケしましょう」
話はまとまり、契約書にサインがなされた。

契約書

ドイツ帝国は、ユダヤ商人ゴルバーグにたいし、ベルリンの全ての煙を一年間三万マルクにて貸すものとす。

総統アルフレド・ヒトラー
商人ゴルバーグ・モーゼ

商人が帰ったあと、ヒトラーと側近は笑いがとまらなかった。
「ヒーヒッヒッヒ！　あのユダヤ公、見事にひっかかったわい。ざまーみろ！」
「やっぱりユダヤ野郎はバカ！優秀なドイツ人ならあんなバカな事本気にしませんよ」
商人は外に出ると、すぐ工場を回った。
「煙を外に出すのでない、わしのものじゃ！」
「おい、このキチガイをつまみ出せ！」
「ばかもん！この契約書を見てみい、ヒトラー総統のサインが目にはいらんか！」
皆は急に気をつけ！　をし、手をピンと伸ばした。
「ハイル・ヒットラー」
こうしてベルリンじゅうの数百の工場は、それぞれユダヤ商人に二万マルクずつ払うことになった。煙出し料である。

再びヒトラー官邸。
側近がヒトラーの所へ駆け込んできた。
「総統、総統！へっへっへ、例のユダヤ商人、毎日毎日総統に会わせろってうるさいんですよ。
今日も門の所で契約書振り回して何かわめいてます。
「ようし、バカにしてやるから呼んでこい」
商人が入ってきた。
「エート、すいません総統・・・・・・あのう、契約書のことですが・・・・」
「フム、どうした、やっぱりダメか」
「あのう・・・・・け、契約書のことで・・・・」
「取り消しか」
「いや、そうでもないんですが・・・・」
「じゃ変更か」
「はい、あのう、実を言うと二ヶ所ばかり・・・・」
「ヒッヒヒヒヒ、何でもきいてやるから、言ってみろ」
「つまり、あと二万マルク支払いますから、一年を五年に、ベルリンじゅうを
ドイツ全土に変えて頂きたいんで・・・・・」

天才

ビルナの伝説にとんちで有名な、モトケ・ハバドという男がいる。そのモトケがある時、名士や大長老のラビたちの前に呼び出された。ラビたちの中には、ポーランドでも屈指の賢い学者がいた。彼がモトケに言った。
「モトケや、ちょっと考えてみたまえ。おまえのその頭を、聖典やタルムードを覚えるのに使ったら、きっと皆はおまえのことを天才だと言ってほめたたえるだろうに」
モトケはじっと考え込んだ。あたかも哲学の問題か何かを解いているように。
「何をそんなに考えることがあるんだね」とラビが尋ねた。
「あっしは考えてるんです。もしあんたが冗談屋になったら、これこそ天才的冗談屋だったてね」

〈ラビ：シナゴーグの主聖職者であり、ユダヤ教とユダヤ人社会の宗教的・精神的指導者〉
〈タルムード：ユダヤ教の律法と伝承の厖大な集大成本。〉

おそまつさまでした、たまには笑ってやって下さい。
興味がある方は、ぜひ図書館にてお読みください。

ユダヤジョークの特徴はパンチのきいた皮肉、気転のきいたウィット、複雑怪奇な論理にいちずけした論法、そのおかしさに真骨頂をみせてくれる。
いずれにせよ、ユダヤジョークが世界のジョークの最高位を占めると言われるには、
正当性があるようですね。

平成十七年二月二十八日　記